

おそろい、それとも別々？

みなさんは初めてひとりで服を買ったときのことを覚えていらっしゃいますか？ 僕の世代の男性は、自分で洋服を買うことをかなり遅くまで経験したことの無い部類に入るかもしれません。そのせいか、服装のセンスに関しては情けない限りです。それもそのはずです。実は、お恥ずかしいのですが、初めてひとりで自分の服を買ったのは高校一年のときでしたから。その時買ったのは、赤色のTシャツでプリンストン大学の紋章が入ったものでした。買ったときはバッチリだと思ったのですが、後から着てみると若干小さくて、大変悔しい思いをしたことをよく覚えています。でも今から考えると、そのあたりが相棒と常に違う服を持つ分岐点だったと思います。もちろん、中学のときはそれぞれの世界が出来ていますから、同時に同じ服装をしてそろって出かけることはありませんでしたが、持っている服はほとんど同じだったような気がします。

ふたごをお持ちのお母さんからよく訊かれることに、服装の問題があります。「ふたごには同じ服を着せるべきでしょうか？」とか、「ふたごでもそれぞれなのだから、別々の服を着せるべきでしょうか？」という質問です。こうした質問は、同性のふたごをお持ちの方々から受けるものです。男女のふたごの場合は、本当に小さいときを除いて（それでも多くの方は色違いなどで工夫されているようです）、かなり初期から別々の服装をさせることが多いからです。でも、同性のふたごの場合は、特に回りの期待からか、どうも同じ服装をさせなければならないというような雰囲気があるようです。

以前にも書いたのですが、どういうわけか小さな同じものが二つ並んでいるとそれだけでかわいく感じるものです。ふたごのサークルのリサイクル会に出されている、同じ靴二足、同じ靴下二足、同じ涎かけ二枚…。見ているだけでかわいくて涙が出てきます。では、やはりふたごは同じ服を着るべきなのでしょう？ そこでもう一度自分自身の子どもの頃の記憶をたどってみたいと思います。子どもの頃、我が家は大変貧しく、いつも母が手作りした服を着ていました。そして、その服はどれもふたごの弟とおそろいのものでした。ところが小学生の3年か4年生の時だと思いますが、どうしても別々の服が欲しくなり、念願かなって別々の服を買ってもらいました。でも、その時は心の底から別々の服が欲しかったのですが、いざ実際に別々の服を着てみると、なんだか心が落ち着かず、結局あまり着なかった記憶があります。しかし、中学に入り、高校に入りして、段々と成長していくと、当然ですが同じ服を着なくなっていきました。結局、同じものを着たがる時期と、別々のものを着たがる時期があるようです。

したがって、ふたごだからといっていつも無理に同じものを着せたり、個性を伸ばすためにといっていつも無理に違うものを着せたりするのではなく、お子さんが同じものを着たがれば同じものを着せ、別々のものを着たがれば別々のものを着せればよいと思います。それに、そもそもそんなに同じ服ばかりあるわけではないのでしょうか？ 最近の服は、昔と比べて丈夫にできていて、三代くらいお下がりにしても全然平気です。うちの娘たちにも、上から下まで全部合わせても50円とか100円位のリサイクル品をよく着せていました。さらに、洗濯の都合や季節の関係で同じものがないときは、別々のものを着せざるを得ません。子どもの気持ちなどを含めてその都度その都度適当に考えて、服を選べばよいと思います。ただでさえ洗濯など家事負担の重いふたご家庭です。「～すべき」とあまり考えすぎないでください。

さて、五味太郎は人気も実力もある日本の絵本会の第一人者ですが、ふたごを題材とした絵本を数多く書いています。一番ユニークなのは、本自体がふたごになっている『ふたごえほん』シリーズ（絵本

館)です。その五味太郎がMとYというイニシャルのついた色違いのおそろいの服を着た女の子のふたごを主人公とした『ふたりではんぶん』(同じく絵本館)という絵本を創っています。この絵本の中でYとMは、キャンディーを半分こにし(5個ずつ)、りんごを半分こにし(真っ二つ)、色紙を半分こにし(二枚と半分ずつ)、そしてリボンを半分こにします。でも、リボンは切るのに失敗して、長さが大分違ってしまいます。ところが、二人はりぼんを首に巻く子(Y)と腕に巻く子(M)と分担して、見事にこの失敗をクリアします。そして、その後二人はりぼんを首と腕に巻いて、それぞれ色違いの服を着たまま、おもちゃを半分こにし、最後にはペットの猫と一緒に抱きます(半分こにしたら死んじゃいますからね)。このように、同じ服を着せる場合でも色違いにしたり、イニシャルをワンポイント的に付けたり、色違いのリボンやアップリケをつけたりしてヴァリエーションにすると楽しいと思います。

最後に大人になったふたごの印象的な出来事を書きたいと思います。1992年に日本で国際ふたご学会が開催されたとき、一卵性双生児でそれぞれが双生児研究者だったアメリカのルイス・キース先生とドナルド・キース先生は全く同じスーツを着て、大变得意げにしていました。また、毎年アメリカのオハイオで行われるふたご大会では、一卵性双生児たちは子どもからお年寄りまで、ほとんどみんな同じ服装をして、楽しそうにしているそうです。大きくなって、それぞれが自分の家族や独自の世界を持った後、もう一度同じ服を着て遊んでみるのはふたごのしあわせの一つなのかもしれません。僕はまだやってみたことはないのですが、いつかしてみたいです。

『ツインズぷらす』第18号(多胎育児サポートネットワーク)から転載・修正